

「あなたがユダヤ人の王であるか」と尋ねられた主イエスは「そのとおりである」(11節)と答えた後、一言もお話しになりませんでした。沈黙の中で、神の救いが実現していったのです。

私たちは今日も『日本基督教団信仰告白』を告白しましたが、その最後の部分は『使徒信条』です。キリスト教が伝えられた所ではどこでも、2,000年以上にわたって、「(主イエスは)ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架にかけられ、死んで葬られ…」と告白されてきました。ピラトは、聖書の登場人物の中でもとりわけ有名な人、そう言って良いでしょう。

ピラトは、主イエスが無実であることを知りながら、結局、十字架にかける決断をしてしまいました。次々と嘘の証言をする証人が登場する裁判で、主イエスが口を開かず、弁解も反論もしなかったからです。

私たちには沈黙してしまう時があります。もう何一つ言葉が口をついて出てこない時、誰ひとり言うことを聞いてはくれない時、などです。しかしこの日、主イエスは、総督ピラトの問いに対して一言、「あなたの言うとおりで」とお答えになり、そして黙ってしまわれました。言葉をもって伝えることを放棄して、沈黙の中で、神のご計画が進んでいくのをご覧になりました。

主イエスは、そのご生涯を通して、いつも大胆に、神の国について、神の救いについて語り続けて来られました。しかし最後に、救いの業を完成するために、沈黙の中で、その命を全部投げ出して下さいました。

ユダヤ人たちは主イエスを十字架にかけて殺すためにピラトのもとに連れて来たのです。群衆は、「十字架につけよ」と叫び続けました。この裁判で、ピラトが主イエスに尋ねたことは実は1つです。「あなたは何者か?」。ピラトの関心は、総督としての地位や権力を守り、ユダヤでの支配を円滑に行うという事でした。もしナザレのイエスが、自分は王だと名乗るなら反逆罪で処罰しなければなりません。しかしピラトは、むしろ主イエスに好感を持っていて、主イエスの話を聞きたいとさえ思っていました。そうしてピラトは、主イエスとユダヤ人の間を行ったり来たりしながら、主イエスがいったい何者かを問い続けたのです。

今日まで、世界中で同じ問いが問われ続けてきました。イエス・キリストとはいったい何者

なのか?もし本当に神のひとり子、救い主なら信じよう。しかし、多くの人がそう言うように偽物なら、もう自分には何の関わりもない者として捨ててしまおう。多くの人がピラトのようにそう考えてきました。このピラトは、主イエスを十字架に架けた張本人ですが、同時に、私たち自身でもあります。主イエスに問いかげながら、主イエスを救い主として受け入れることができず、右往左往してしまう私たちです。

この裁判で、主イエスを死刑にしたのは誰か。聖書を読むたびに私たち自身が問われます。ピラトか、パリサイ人や律法学者か、煽動されて叫び続けた群衆か、あるいは、元々死刑にされるはずだったバラバか?代々のキリスト者は、このいずれにも、自分自身が当てはまることを知り、受け入れ、神の前に懺悔してきました。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け…」と告白するたびに、私たちは自分自身の罪深さを知らされます。自分の生活を守るために、神無しに生きようとする罪人、それが私たちなのです。

主イエスの十字架のかたわらに、私たちは自分自身を発見します。そして、この私の人生全体の中で、このお方と関係の無い瞬間など、一瞬たりとも無いのだと知らされます。この私の罪を赦し、死と滅びから開放するために、主イエスは十字架の上で死んで下さいました。一切の反論を放棄して、十字架から下りることもせずに、神に捨てられて滅ぼされる絶望まで味わい尽くして下さいました。

私たちの身代わりに主イエスが死んで下さった事を信じるなら、救いはあなたの手に入ると聖書は言います。「御子を信じる者は1人も滅びないで永遠の命を得る」、これが聖書の約束です。私たちの救いを実現するために、私たちの身代わりとなって死ぬために、主イエスは最後まで口を閉ざして歩まれました。主イエスは黙って鞭打たれ、十字架に歩まれ、そこで私たちの救いが実現したのです。

誰でも主イエスを信じ、その救いによって生きたいと願うものは躊躇する必要はありません。たとえ死の眠りについてもなお変わる事のない神の救いが、あなたを捕らえて離さないのです。世界中で、このお方を信じる同じ礼拝が行われています。主イエスを救い主と信じて、確かな命を頂いて、信仰者が歩んでいます。